

本は読む

書・榊 莫山

名著

60

心に触れる

現代×文芸

7

『ブリジアン』

柴崎友香著

私たちは「なつかしさ」を語るのが好きだ。後悔や怨念も、ほんとうは好きだ。小説は、そうした過去へのこだわりと言葉を与えるジャンルとして栄えてきた。『ブリジアン』も徹底的に過去を描く作品である。



*2011年刊。現在は河出文庫(680円)

曾野綾子

●「私」朝高で、まがみ

夏樹静子

●『公』の構築

登場します。

昭和な匂い 少女の記憶

く、脱力的。ポップ・テイラーが出てくる魔法のひとつきもある。しかし、いじめで殴られ出血したり、交通事故で指がいったん切断されたり、ということも。それでも静かなのだ。「どこか変だぞ」とも思う。柴崎は情動に身を任せない。世界を見る目が遠い。ドラマが始まって、ぐいっとブレイキを踏む。タイトルの「ブリジアン」は濃い緑色の顔料のこと。主人公の目にまず飛びこむのは色なのだ。「なんか黄色くない?」「だいたい黄色い」といった会話が示すよう



本を読む

本の値段は税抜きです

に、風景はまずは突出する色として捉えられる。そこへ「太陽は、他にどこにもないような色で、光っていた」とあるとドキッとさせる。情緒の一部が冷えていく。そこへ世界のざらつとした無機的な感触や、漠たる不安が滲む。人間の向こうに、すべてを越えて、能面のような世界の無表情がちらっと見えるのだ。平成になり、昭和との明確な断絶が見えない中、「近い昔」は既視感の漂う古さばかりが目についた。『ブリジアン』にもそんな空気。「なつかしさ」は無機的な時間に感情の温もりを与えらるが、柴崎はあえてその淀んだ滞留をとらえた。そこに昭和のほんとうの顔のぞくのかもわからない。(阿部公彦・英文学者)